

## 史料紹介

古宇田 亮 修

当研究所では、平成一七年度（二〇〇五）より社会福祉法人錦華学院に所蔵される東京感化院時代の史料の翻刻公開を開始した。本号はその一三冊目に当たると。過去一二冊においては、第七号を除き明治期の日誌史料を中心として翻刻を掲載してきた。本号もまた、明治四四年から翌四五年にわたる時期の東京感化院日誌一冊の翻刻を掲載するものである。

本号の翻刻作業については、従来通り北都古文書研究会（会長齋藤博氏）の全面的な御協力を仰いだ。ここに記して心より御礼申し上げる次第である。なお本号の編集・版下作成は、筆者の担当になるものである。

〈史料 64〉日誌 家族寮（明治四十四年一月起）

当史料は、一二行書きの野紙で全二六一丁から成る和綴じ本であり、二六〇丁目まで記載がある。記載期間は、明治四四年元日から翌四五年四月三〇日までの一年四ヶ月分である。史料の状態は、わずかな虫損が見られるが、判読に支障をきたすほどではなく、概ね良好といえよう。文字の総数は約一二万字であり、一丁に換算して平均

約四二三字、一日に換算して平均約二二六字となり、一日当りの記載量は充実しているといえよう。同時期の日誌としては、〈史料63〉『日誌』（明治四十四年）<sup>(1)</sup>があり、相互に参照することが可能である。また、記載者については、その筆跡から数名が関わっていると考えられるが、詳細は未確定である。

内容としては、表題からも分かるように家族寮に関する日誌であり、〈史料62〉『日誌 家族』（明治四十三年）<sup>(2)</sup>の後継に当るものと考えられる。同時期の庶務課日誌である〈史料63〉や、後継の日誌〈史料65〉『日誌 家族寮』（明治四十五年五月起）<sup>(3)</sup>も現存することをあわせ考えると、この時期の史料は比較的よく保存されているといえよう。

## 註

- (1) 『東京感化院関係史料集(12)』、二〇〇九年、所収。  
 (2) 同右。  
 (3) 『東京感化院関係史料集(14)』（未刊）、収録予定。

(当研究所主任研究員)